

# ゆがみ取り SPAT

## —下巻 胸椎・頸椎編—

### まえがき

ゆがみ取り SPAT 上巻では、その理論的裏付である操体理論の総論と骨盤ゆがみ取り SPAT の手技および適応疾患、操体理論の各論における呼吸と飲食について解説した。下巻では、上部胸椎と上部頸椎のゆがみ取り SPAT ならびに操体理論の各論における運動・ストレス管理・環境について記述する。胸椎ゆがみ取り SPAT は肩こりなど上半身の障害に、頸椎ゆがみ取り SPAT は頭痛など頭頸部の障害に適応がある。それぞれの適応症の診断と治療についても解説する。

2019 年 12 月から始まった新型コロナウイルスのパンデミック以来、社会情勢は激変した。医療の世界でも、受療抑制といった受療行動の変化による経営悪化の声がそこかしこで聞こえてくる。治療家がほとんどを占めるとされる読者の中にも、患者数や通院頻度の減少で恐怖に近い不安を抱えている人が多いのではないだろうか。

こうした困難な情勢で生き残るにはどうすればいいのか。そのための有力な方法を提供するのが、ゆがみ取り SPAT である。医療需要が減少する環境を生き抜くためには、独自の「治せる技術」を身につけて他院との差別化を図るのが強力な手段となる。しかし、経営環境が激変したからといって、今から技術講習会に参加し、修得に長い時間や費用がかかる技術に取り組んでいては間に合わない。その上、技術によってはしっかりと効果を出せる熟練の域に達するのに、さらに年月がかかる場合もある。

ゆがみ取り SPAT は、動診（運動分析によるゆがみ診断）→操体法（筋緊張低減）→ゆがみ矯正、の 3 ステップで完結し、安全に短時間で施術を完了することができる。しかも、視診によるゆがみ判定ではないため、長期間の訓練を受けなくてもゆがみの方向と強度を確実に判定できる。続く操体法により、短時間に効率よく筋緊張を低減し安全に骨格矯正ができる。受療抑制で時間に余裕のあるこの機会を最大限に生かし、本書に付属する DVD と解説文を用いて練習すれば、すぐにでも臨床応用が可能である。

2002 年の『医道の日本』誌での発表以来、ゆがみ取り SPAT は多くの臨床家やトレーナーに現場で活用されている。臨床方面では統合医療分野の高名な大学教授や医師も講習を受けており、また大リーグや J リーグで活躍するプロ野球選手のトレーナーや、フィットネスクラブ経営者にも取り入れられている。

コロナ禍終息までの期間がまったく見通せない今、補助金や経費の削減といった守りの対策だけでは未来の展望は開けない。夢破れて閉院という最悪の結末を避けるためにも、新たな独自技術を短期間に身につける「攻めの姿勢」で生き延びていただきたい。

ゆがみ取り SPAT とその基盤となる操体理論を修得・理解すると、治癒に役立つ施術や生活習慣指導を、今まで以上に確信を持って行うことができる。これは経営的安定のみならず、「患者さんに治してもらおう」という治療家としての根源的喜びと生きがいにつながっていくはずだ。読者がそうした境地にたどり着くために、きっと本書が役立つと確信している。